



技研ニュース

1991. 3

日本自転車産業振興協会 技術研究所

No. 120

自転車道の開発を

副会長 織田季明

標題の自転車道の「道」は道路のことではない。剣道、柔道、茶道等の道と同じような意味で、「礼儀作法を含んだ教義」とでも言うておこう。流行のことばで言えばソフトウエアということになるろうか。

与謝野晶子の詠んだ有名な歌に

やは肌のあつき血潮に触れても見で

さびしからずや道を説く君

というのがあるが、ここに言う道もソフトな方の道である。いまごろ自転車道などと提唱するやつは、晶子から野暮な男と冷笑されそうである。

しかし、言い訳をすれば私は道を説こうとしているのではない。どなたかいままでなかった自転車道というものを、体系として考え、編み出してくださいと頼んでいるのである。

ところで、どういうわけか日本に古くからある武道や芸事には、たいてい道という文字がついている。剣道、柔道、茶道等々。また道がついていない能や歌舞伎なども一括して芸道と言っている。しかしこれらもはじめから「道」として呼ばれていたのではない。

たとえば剣道について言えば、当初は人を殺傷する実用のものであり、剣術と称していたし、柔道についても柔術と言っていた。茶道も当初は日常茶飯のこととして茶のむことにすぎなかったものである。

その裏づけの一つとして、日本の陸軍においては昭和二十年の敗戦を迎えるまで、剣道とは言わず剣術でおし

通していた。陸軍における竹刀をもつての練習は、文字通り敵を殺傷する実用のためのものであったからである。

一方、明治以降に西洋からはいつてきた体操、芸事などについては、その末尾に道をつけて呼ぶことはほとんどない。野球道、ピアノ道などという言葉はきいたことがない。フェンシングは剣道に似たものではあるがフェンシング道とは言わない。理由はよくわからないが、まさか与謝野晶子に「道を説く君」とからかわれるのをおそれたわけではあるまい。

それでは道と術とはどう違うのか。

自問自答しながらの答が正しいかどうか自信はないが、剣道を例にとれば、敵を殺傷する実用の術から、平和な江戸時代の磨きを経て、実用を超えた文化として剣道というものができあがり、今日のものがあると言えるのではないか（その仕上げをしたのは千葉周作であると言われている）。能についても、田舎回りの芝居が世阿弥などによって洗練され、今日の文化としての能があると言われている。

いま自転車は、豊かな時代を迎えて実用性から豊かさに富んだものへと変わろうとしている。

先日伊豆へ旅行したとき、しのつく雨の中を遠足にでもゆくかのように若い男女が二、三十人、自転車に乗って走っているのを見て感動した。雨具を身にまとっているところを見ると、雨天を承知で宿を出てきたに違いない。こんな風景は私の若い頃には考えられなかったもの

である。

しかし豊かさにはいつもその裏に落とし穴があり、慣れたところにその穴に落とされる。放置自転車問題も豊かさがもたらした落とし穴ではなかろうか。

昨年五月の自転車月間の何日目かに、自転車についてのシンポジウムが催されたが、その最後の質疑応答の時間に、ある区役所の人「今日のシンポジウムは駅前の放置自転車問題について何一つ回答を与えてくれなかった」と不満げに述べていたのが忘れられない。

結びとして、私が本稿によって提案したいことは豊かさに満ちた世にあって、表も裏も始めも終りも包みこんで、人々は自転車にどう対応すべきか、人の自転車への総合的な対応の仕方はどうあるべきか、それをソフトな方の自転車道として、どなたか開発してくれませんかということである。

ここまで書いてテレビのスイッチを入れたら、飼犬、

飼猫について放映していた。

近頃団地などでも犬や猫を飼う人が多く結構可愛がっているが、大部分の人は引越の際にいっしょにつれてゆかないで放置しておく。近所の人はその放置された犬や猫をいやがって区役所へ連絡する。区役所はつかまえて留置し、一週間しても引きとり手がないときは殺す。殺しの役は獣医である。その獣医がなげいていた。

「私は動物を生かすために勉強してきたのに、殺す役に使われるとは」と。

私はこの画面を見ながら豊かな時代とはいえ、今の世にソフトな方の自転車道の開発は、ハードな方の自転車道の開発以上にむずかしいことだと思わずにいられなかった。

もしかしたら、ゆきつくところは「道に道なし」ということかもしれない。